

俳句雑誌



空  
令和5年3月25日発行  
第105巻5号  
通巻第105号



2023・3・4

**SORA** 105号

女神

柴田佐知子

霜晴や牛舎に詰まる牛の息

群狼と化してデンドラ野を発ちぬ

降る雪や釈放の無き思想犯

―「俳句界」十二月号より―

灘よりも渚輝く破魔矢かな

初風や女神へ酒の樽を割る

卓広く使ひてひとり屠蘇祝ふ

初鶏のこゑ抜けてゆく竹林

灘統ぶる女神のみ醒め寒満月

一代で成りし屋敷や鯰起し

狐の栖崩せば勾玉や剣

木枯や賭博ひらかれさうな寺

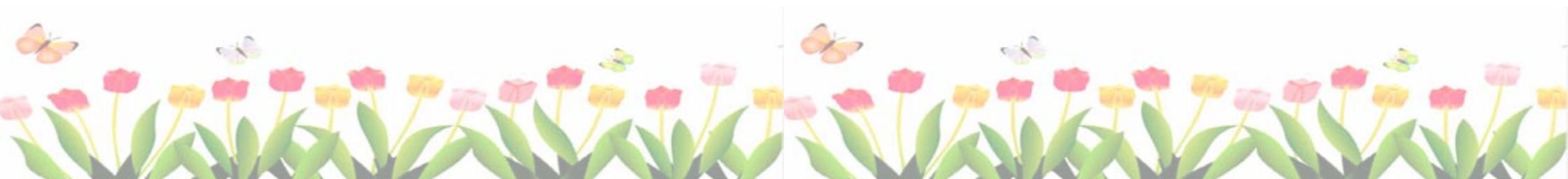
狐火の群れぬ一つを攫はうか

素つ気なき猫を愛して冬籠

寒晴や懸垂の顔歪みだす

妹の恋にたぢろぎ氷柱折る

―「俳句」十二月号より―



福岡 高倉 和子

手拭の柄を揃へて夏祭

薙刀を空へ突き出す飾り山笠

飾り山笠武将の口のみなへの字

馬の尾の大きくなびく飾り山笠

合戦の勢ひそのまま山笠走る

いつせいに布巾干さるる祭あと

結ばれぬ人も見てゐる花火かな

水を打つ昨日と同じ顔をして

東京 中田みなみ

オートバイ次々止まる卯浪かな

放心の海猫夕映えに並びをり

黒島はクルス島とや灯の涼し

新豆腐提げて下船の修道女

卯浪立つ「愛はちから」のチャペルの碑

みちのくの袴りを繋ぐ烏賊釣火

秋晴の廃校フォークソングふと

満月や島に初めて信号機

長崎 荒井千佐代

梅干して海より暮るる母の里

通されし風鈴の部屋落ち着かず

金魚田の水面は赤やさざ波も

負ふ罪を消すごと炎天を歩む

枇杷の生る家の重なる斜面都市

方舟に片足かけて昼寝覚

ははの髪思ひ出しつつ髪洗ふ

青葉木菟ねむれば一と日命減る

埼玉 服部早苗

そら豆の花の直視を受けとむる

月桂樹の堅葉を干して目借時

出窓とは人恋ふる窓アマリリス

樟落葉音なくシテの前うしろ

宝登山も父不見山も走り梅雨

繫留の杭夏至の日の影つくる

いごつそう並ぶ船ばた鰹釣

旱天や草の根深くふかく張る



北九州 深川淑枝

座す脛に莫座あらあらと川床涼み

鮎食ぶる鮎の生き来し川眺め

川音の渡る名残の蚩かな

隠し湯に河鹿笛きく晴夜かな

宇治十帖絵巻涼しき灯のもとに

古刹への径葛の花踏みしだき

風青し鳥獸戯画を蔵す寺

剃刀に首そられぬる祭髪

広島 戸栗末廣

万緑の中にももの音なかりけり

暮鳴いて夜陰が少しづつうごく

自転車が自転車を追ふ更衣

神杉の夏盛んなる樹肌かな

日盛や羽ある虫が地を歩き

雨分けて放哉が来る夏野かな

葭雀まだ老人になりきれず

夏つばめ車まるごと洗ひけり

福岡 角野良生

塩を焚く湯気の彼方を鳥帰る

舟のなき舟屋を洗ふ春の潮

春風を押ししては手繰る太極拳

百年の酒蔵百年の麴黴

弥撒終へて甘夏選りに加はれり

一輛車くる麦秋の彼方より

落ちたのか落とされたのか燕の子

外れたき蟻も居ろうに蟻の列



空集抄 柴田佐知子抄出

病み疲れ春待つ日々を如何にせむ

脱ぎて着ることも幸せ春迎ふ

父の日も独りを贅としてあたり

濃むほどの後悔ありて螢の夜

万緑やしづけきものに磨崖仏

もう田には戻れぬ茅花流しかな

黒板に混む数式や蟬しぐれ

ベビー服用のハンガー五月来る

向日葵の大地揺るがすほどの数

手加減のなき声の飛ぶ初稽古

山開き火口へ幣の落ちゆけり

草丈をふはと昼顔這ひにけり

羽化したる蝉はつかのま森の色

草刈機古墳の土を舞ひ立たす

睡蓮をささふる水の暗さかな

狂ふとは生きることなり火取虫

解禁に一番乗りの囹圄

鯉呼吸する藤棚に入りてより

青すだれ時計なき部屋落ち着かず

星流る戦禍の町よりバレエ団

旅の荷にあまたの葉秋気澄む

金魚玉袋小路の家に住む



宮井知英

中田みなみ

角野良生

高倉和子

戸栗末廣

深川淑枝

永淵恵子

曾根富久恵

石橋幾代

吉田 律

山本則男

河原敬子

今井康子

原 友子

星加鷹彦

大西乃子

松田明子

えとう樹里

森田明成

田中とし江

林 徹也

吉田悦子





水中花こつんと下りて開きけり

ががんぼや遠野の河童つち面赤し

シーソーは競はぬ遊び子供の日

蛇見えてブレイキ効かぬ猫車

紫陽花の花の隙間に闇があり

かなかなが鳴く眼薬をさす時間

新涼や回廊わたる杖の音

目高飼ふ寺の千年桂かな

山恋ひて庭に増やせり藪萱草

蚊を打つて手の平ひらく男かな

手毬唄一番歌へば茶葉ひらく

さらさらと流るる月日林檎むく

星祭しづくのやうなピアスつけ

中村瑞枝

神田たみ子

野中みのり

坂口学

本多トミ

山田正子

岡村尚子

青木朋子

村上二三

押田裕見子

沖本栲杞

鈴懸るい

石井みゆき

水羊羹今日はひとりが楽しい日

死んでなほ動き出しさう人百足

白日傘やうやく似合ふ歳となる

虫瘤を狙ふ二丁の水鉄砲

夾竹桃身振り大きく政治論

三伏や夕日滴る大庇

留守番の犬の居場所は夏座敷

卯の花くだし土偶にひとみなき眼

夜神楽や太刀を振るたび紙垂揺れて

鷲掴みされたるごとき昼寝覚

四方の春好きな絵本を囁る子も

がんと釘打ちて夏空雲もなし

父ははの伝言のごと螢舞ふ

矢野綾子

むつみ蓮

仲里奈央

高畑桂

田岡千章

高畠浩一

立花一枝

荷宮克代

後藤園子

あさなが捷

伊東希

兒玉充代

日高孝



保護犬の和み来し瞳や室の花

残る日の今どの辺り初明り

木葉髪梳きぬる指も頼り無し

糸田 宮井知英

脱ぎて着ることも幸せ春迎ふ

落柿や五寸足らずの獣道

陽炎や吾もかぎろひぬるならむ

福岡 角野良生

うぶすなの森の深さや鳥渡る

船洗ふ漁夫の口笛朝つばめ

喫水線叩き冬潮満ちて来る

柏餅言葉に覚悟在りし世も

人恋うて人遠ざくる冬籠

血の味はくろがねの味青芒

猫の子に遊んでもらふ冬日かな

囃釣果もろとも焼かれけり

病み疲れ春待つ日々を如何にせむ

父の日も独りを贅としてあたり

保護犬を貰ひにジングルベルの街

東京 中田みなみ

膿むほどの後悔ありて螢の夜

福岡 高倉和子

信号の赤なるうちに噓せり

箱眼鏡覗き波音遠くなる

クリスマス餌啗へ保護犬は隅へ

魚屋の奥の電球土用あい

叫ぶごと走り抜けたる羽抜鶏

もう田には戻れぬ茅花流しかな

拭き上げし曇の風も帰省かな

裏山はほととぎす来るころの色

母の爪思ひ出しをり夜の秋

水神の幣さやさやと青葉木菟

鮎釣の半身霧の中にあり

広島 戸栗末廣

黒板に混む数式や蟬しぐれ

福岡 永淵恵子

みづうみを風すべり来る藤寝椅子

鵜飼果て闇のふ厚くなりけり

万緑やしづけきものに磨崖仏

大南風百余の碇天日干し

父の日の米丹念に研ぎにけり

パナマ帽いつも手ぶらでありけり

雨脚の斜めに変はる苔の花

キャンプより戻り物言ひぞんざいに

植込みに棲みつく蟾と老いにけり

祭鱧女ざかりの教へ子と

堰板の今日より高し代田風

北州 深川淑枝

ベビー服用のハンガー五月来る

直方 曾根富久恵

植糸終へて古墳の影の差す田かな

夜灌に嬰兒のもの加はりぬ

村老いて昼静かなり稲の花

蝮谷より螢の湧き出づる